

2020. 12. 20 (日) マラキ4：1～3

4:1 「見よ、その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行う者は藁となる。迫り来るその日は彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。——万軍の主は言われる——

4:2 しかしあなたがた、わたしの名を恐れる者には、義の太陽が昇る。その翼に癒やしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のように跳ね回る。

4:3 あなたがたはまた、悪者どもを踏みつける。彼らは、わたしが事を行う日に、あなたがたの足の下で灰となるからだ。——万軍の主は言われる。

#### <説教>

マラキ（「わたしの使者」という意味）は紀元前 5 世紀（400 年代）中頃に活動した、旧約聖書の最後の預言者でした。

エズラ（祭司・学者）やネヘミヤ（総督）も大体同じ頃の人です。

そのマラキ書の最後、4 章（ヘブル語聖書では 3 章のまま続く）で、主なる神はマラキを通して約 400 年後のメシヤ（即ちキリスト）の到来を、そしてそのキリストに先立ってバプテスマのヨハネをお遣わしになることをお告げになりました。

神の民イスラエル（南ユダ王国）は神への不信仰不従順のゆえに紀元前 6 世紀（580 年代）にバビロン捕囚という神のさばきを受けていました。

その後、バビロンはペルシヤ帝国によって制服されます（紀元前 540 年頃）。

神はペルシヤ王キュロスを通してイスラエルの民をエルサレムに帰還させ、破壊された神殿の再建を命じ、紀元前 516 年にエルサレムの神殿（第 2 神殿）が再建されました。

しかしその後民はまたまた墮落し、神への不信仰不従順に逆戻りしてしまいました。

それで、エズラ記やネヘミヤ記に書かれているような、神への立ち返り、悔い改め、宗教改革がまた必要になったのでしょうか。

預言者マラキは、そんなイスラエルの民の罪の姿を明らかにして警告を発し、更にはキリストの到来によって終末の日（時代）を神がもたらし、キリストによって罪人にさばきと救いをもたらすことを語ったのです。

このキリストの到来というのは、マラキの時代から約 400 年後に起こった（私たちがクリスマスと呼んでいる）一度目の到来（降誕）と、現代も未だなお起こっていない（しかし必ず起こる）二度目の到来（再臨）の二つを指すことです。

今日、アドヴェント（待降節）からクリスマス（降誕節）のときを過ごしている私たちは、マラキの預言から降誕のキリストに重きを置いて、キリストがどういうお方なのかを学びたいと思います。

さて、マラキ書 1～3 章を見ると、このときのイスラエルの民は自分たちに対する神の愛を疑い、神を侮り、神に仕えても神の命令を守っても無駄で何の得にもならないと失望し、なげやりになっていました。

神を見失い、神に対して高ぶり、不信仰不従順に陥り、神と人に対して悪を行っていました。

それが神の民イスラエルの惨めであわれな姿でした。

それで、ついにキリストが彼らのところに来て、不信仰（者）をさばき、再び信仰（者）を起こしてご自分のもとにお集めになる、その日そのときがやがて必ず来ると神は言われたのです。

**4:1 「見よ、その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行う者は藁となる。迫り来るその日は彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。——万軍の主は言われる——**

〈その日が来る〉とはキリストが到来なさる日が来るということですが、ここでは「キリストが来る」と言ってもいいと思います。

この世に到来なさるキリスト・イエスのことを〈かまどのように燃え〉る（火）とマラキは言い表しました。

そのキリストのみわざについてマラキは宣告します。

〈すべて高ぶる者、すべて悪を行う者〉をキリストは〈藁〉として〈彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない〉と言うのです。

これは誰も打ち勝つことのできない、唯ひとり最強のお方〈万軍の主〉の確かな間違いのない宣告です。

火は〈高ぶる者〉〈悪を行う者〉に対する神の怒りの象徴であり、ときには実際にさばきの手段でした。

神はソドムとゴモラに天から硫黄と火を降らせて滅ぼしました（創世記 19 章）。

南ユダ王国がバビロンに滅ぼされ捕囚にあったとき、〈神の宮は焼かれ、エルサレムの城壁は打ち壊され、その高殿はすべて火で焼かれ〉（Ⅱ歴代 36:19）しました。

それでもその中で神のあわれみによって生き残り、また捕囚の地からユダヤの地に、エルサレムに帰って来た人々がいました。

マラキの時代はその人々の次のまた次の世代だったと思いますが、そのイスラエルの民が先に見たように、神の愛を疑い、神を侮り、神に仕えても神の命令を守っても無駄で何の得にもならないと失望し、なげやりになっていました。

神を見失い、神に対して高ぶり、不信仰不従順に陥り、神と人に対して悪を行っていました。

そんな彼らの不信仰、高ぶり、悪を〈根も枝も残さない〉ように〈藁〉のごとく〈焼き尽くし〉て彼らの内から一掃してくださるために、また、神を見失っている彼らが神を見ることができるよう、そのためにこの世に来てくださるのがキリストだとマラキは言うのです。

〈父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされ〉（ヨハネ 1:18）るのであり、ひとり子の神キリスト・イエスを見る人は、父なる神を見る（ヨハネ 14:9）のです。

神の民を惑わし、罪に誘惑する〈高ぶる者〉〈悪を行う者〉、神の敵と戦い、蹴散らし、ついには悪魔という死の力を持つ者をご自分の十字架の死によって滅ぼされる〈ヘブル 2:14〉、そのためにキリスト・イエスは来てくださる（くださった）のです。

今は中断していますが、マタイの福音書からずっと学んで、見ているキリストの姿はそういうものでした。

そのように悪魔とその手下どもと戦い、その者らを焼き尽くす火であるキリストは、〈あなたがた、わたしの名を恐れる者には〉〈義の太陽〉であるとマラキは言います。

4:2 しかしあなたがた、わたしの名を恐れる者には、義の太陽が昇る。その翼に癒やしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のように跳ね回る。

4:3 あなたがたはまた、悪者どもを踏みつける。彼らは、わたしが事を行う日に、あなたがたの足の下で灰となるからだ。——万軍の主は言われる。

悪魔は〈この暗闇の世界の支配者〉(エペソ 6:12)と言えるのですが、キリストはその世界を隅々まで明るく照らす「世の光」、〈義の太陽〉であります。

善を悪、悪を善と言って惑わす悪魔の言葉を、キリストはそのみことばによって照らし、その偽りを明るみに出し、暴きます。

人が善を悪と言い、悪を善だと言い張って行っている、そのごまかしをキリストはそのみことばによって暴きます。

〈すべてのものは光によって明るみに引き出され、明らかにされます。〉(エペソ 5:13)使徒ヨハネはキリストについてこう証言しました。

〈この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。〉(ヨハネ 1:4-5)

〈すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。〉(ヨハネ 1:9)

そしてイエスご自身が、〈「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」〉(ヨハネ 8:12)と言われました。

イエスが〈ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある、湖のほとりの町カペナウムに来て住まれた〉とき〈「ゼブルンの地とナフタリの地、海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦人のガリラヤ。闇の中に住んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が昇る。」〉というイザヤの預言が成就したのです(マタイ 4:13-16)。

ですから、人の目にはどれほど“お先真っ暗”で希望がないように見えても、イエスには光があり、希望があるのです。

〈その翼に癒やしがある〉とマラキは言います。

古代オリエント世界では円盤に翼をつけた絵で太陽を表したので、〈翼〉とは太陽光線のことです。

そして聖書では〈翼〉は「覆う」ことと関連して、愛をもって保護し、養い、育てることを表します。

イスラエルの民に対して神は「あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来たことを見た。」(出エジプト 19:4)と言われました。

ルツがボアズに「あなたの覆いを、あなたのはしための上に広げてください。」と言った(ルツ 3:9)意味は、私の夫となって私を買い戻し、あなたのもとし、私を養い助け守ってくださいということでした。

要するに〈その翼〉とはやはりキリストご自身のことだと言うこともできるし、またキ

リストのみことばだと言うこともできるでしょう。

キリスト・イエスに、またそのみことばに文字通り〈癒やしがあ〉ることもまたマタイの福音書を学んで私たちは見てきたことでした。

預言者イザヤは〈主を待ち望む者は新しく力を得、驚のように、翼を広げて上ることができる。〉(イザヤ 40:31)と言いましたが、この〈翼〉も何やらキリストと関係があるようにも思えて来ました。

確かに〈義の太陽〉であるキリストが、キリストの光である〈翼〉が、〈主を待ち望む者〉、主の御名を恐れる者を悪魔の暗闇の支配から飛び出させ、神の国へ、光なる神の御支配の中へと入れて救ってくださるのです。

〈義の太陽〉であるキリストの光に照らされる人はどれほど罪深くても、あのマラキの時代のイスラエルの民のように疑い、不信仰、失望のどん底の闇にあっても、闇から光に移される、いや闇から光になる、即ち全く生まれ変わるのです。

〈あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあって光となりました。〉(エペソ 5:8a)と使徒パウロは言います。

〈義の太陽〉であるキリストにあって闇から光に生まれ変わり、キリストの愛と義によって覆われ、癒やされ、守られ、助けられ、キリストのみことばによって十分に養われる〈あなたがたは〉〈外に出て〉、元気いっぱい、力いっぱい、喜びいっぱい、感謝いっぱい〈牛舎の子牛のように跳ね回る〉とマラキは言います。

〈外〉とはなおも多くの人が悪魔に惑わされ、闇であり、〈高ぶる者〉〈悪を行う者〉〈悪者ども〉が大手を振って闊歩(かっぽ)し、栄えているように見える罪の世です。

光から闇への誘惑渦巻く罪の世です。

〈サタンでさえ光の御使いに変装し〉(Ⅱコリント 11:14)、〈サタンのしもべどもが義のしもべに変装〉する(同 11:15)罪の世です。

しかしその闇のただ中で、光とさせていただいた私たち神の民は〈光の子どもとして歩み〉(エペソ 5:8b)、世の罪と、またなお残る自らの罪と戦うのです。

〈牛舎の子牛のように跳ね回〉って神の敵を〈悪者どもを踏みつける〉と言われます。

彼らの反撃を受けて〈かかとを打〉(創世記 3:15)たれ傷つくこともあるでしょう。

しかし〈その翼に癒やしがある〉のでした。

そしてついに〈万軍の主〉が〈事を行う日に〉、〈悪者ども〉は〈あなたがたの足の下で灰となる〉との約束です。

これは私たちの勝利ではありません。

「かまどのように燃える」「焼き尽くす」火を放つ〈義の太陽〉であるキリスト・イエスの完全な勝利です。

私たちはただ神の恵みにより、あわれみによってキリストの勝利に与るだけなのです。

そしてそれで十分であり、既に来られ、また再び来られるキリストに栄光を帰し、讃美と感謝を捧げ、自分自身をお献げして信じ従うほかないのです。